



勉学と看護実習の秋

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

●2002年10～11月

9月にのんびりしていた分、10、11月は課題の提出締め切りが続いて落ち着かなかった。小論文はこれまで何度か書いたけれど、資料集めにも時間がかかるし、書き始めてからも課題の内容に沿っているか再確認しないと、質問と食い違ったことを書いていたりするから危ない。いつもクラスメイトのシャメリーや指導教官のアナ、それに上級生のフラットメイトに相談して、助言をもらって、触発してもらっている。

課題はバングラデシュからの移民が妊娠した例をもとに、この状況で起こってくる問題を論じるケーススタディ。私の住んでいるサリー州は外国人人口が2.5%と低いけど、実習先でインド、パキスタン、バングラデシュ出身の妊産婦と会う機会は時々あってコミュニケーションの難しさは実感していたし、イギリスの医療サービスに馴染めない彼女たちの戸惑いは、同じ外国人として理解できるので、この課題に取り組むのはおもしろかった。

11月に看護科実習があった。これが3年間の中で唯一の看護科実習になる。いつも接している「健康／正常な妊産婦と新生児」と違って、この実習で会うのは医療行為を受ける「患者」だったし、一緒に働くのは看護婦と医師だった。だからこの6週間はかなり新鮮だった。と言うよりもショックだった。なにせ初日から男性患者の、しかも大腸鏡検査を見学したのだから。助産に関することもこの機

会に見たかったので、婦人科の手術(腹腔鏡検査、コイル挿入、子宮内容除去術)にも立ち会わせてもらった。今まで見た手術は半身麻酔の帝王切開だけだったので、全身麻酔下で行なわれる手術に慣れなくて、気持ちの整理がつかず苦労した。そんな環境で見るからに戸惑っている私に、医師や手術室スタッフが目の前で行なわれていることを丁寧に説明してくれたのには感謝している。

精神科患者に行なわれるECT(電気ショック療法)と不整脈を矯正する電気ショック療法にも全身麻酔が使われた。看護学生が実習で立ち会ったのだったら、ECTの理論も勉強してそれに臨むだろうし肯定的に取れるだろうけれど、「看護の触りだけ」の実習で来ている助産学生の私には、なかなか消化できない週間だった。「早く助産に戻りたい!」とクラスメイトたちと愚痴っていた。

11月に入って、年に一度の助産学生会議がロンドンであったので、シャメリーと参加した。「医学に頼らない正常なお産」に焦点が当てられた、助産婦賛歌的イベントだった。全国から250人の学生が集まった割には、学生が日々対面している実際の問題(奨学金、授業内容、実習など)に触れられなかったので、参加者から不満も出ていた。休憩時間におしゃべりした学生の大学では、教師の人脈の広さゆえ、学外から講師をよんだり、カリキュラムの枠を超えた企画があるらしく、うらやましくなった。